日本

# 新永代記

今世長者譚

一

特
へ逸13
2063
1-6

序

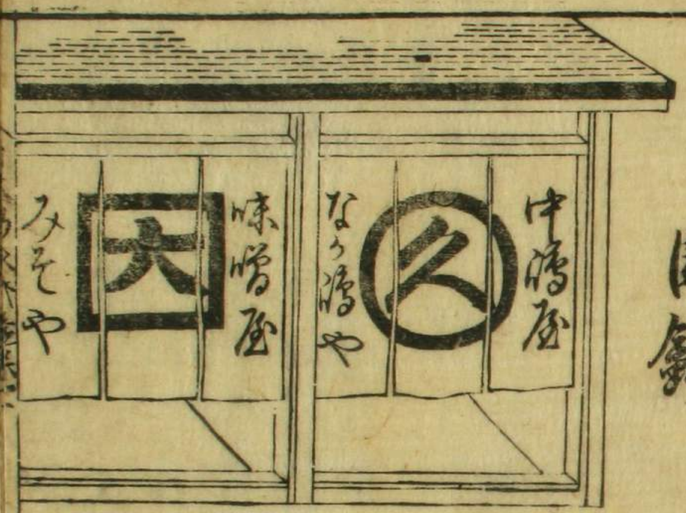
一日長油都与一生乃
おろそ　の換えかへ
ぶ事あるべき家ふちをも
世乃町人家業を怪しみ
ゆ　こ
ゆるを金銀のあれ貧と
たから

饗庭文庫

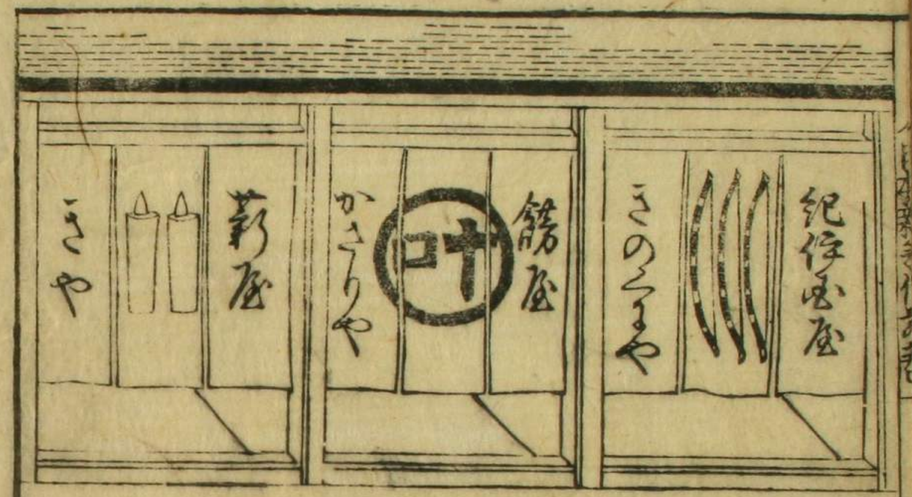
[illegible]は是を祝儀とよしとあるが
来福[illegible]神の[illegible]
[illegible]
[illegible]をかぞへ[illegible]
新永代蔵[illegible]おさめ[illegible]
風俗　雪水[illegible]

# 日本新永代蔵巻之一

## 目録




白銀百枚蔵書御[illegible]
大坂にうつれる[illegible]大仏[illegible]沼
泉州堺の沼新[illegible]代かぶの海の
五文[illegible]銭を一口小鬼味噌屋
着板よ作云[illegible]石の[illegible]
毒[illegible]を業[illegible]




北斗の蓋は蓋曝深し北斗

一粒万倍乃粒と新田の出来

者相の南そ〻牛川拾

二年間の約束の彩色の粒

那別北代実様の仕合

連寄なんの糸〻二筋北斗の

子黄間拾の刺そて海さん

蒲鉾の赤れの赤公使十番の時差

月雪花鳥やさうのあるよ



日本彩永代蔵巻之一

向泥百万両兼書の御祝儀

国より憲章ゆり三ヶ條の形今古年乃御代より

生れて糧より前也宝より患るもたるもの科人を

う〻台際お意の稼ぐ〻ども代勤めず泥ゆして

徒より貝をついや〻玉薬より恵を深すさうしとの不美悟

子百〻いの〻ホちり士農工高たより生世之男乃ちゆ

とさくにいさうの代年をたゆ〻ゆ功をつ〻芳をか〻

たるちゆ〻ホうとなぐうと事にわ〻ど〻ゆ〻十ゆ〻ち

そくみて家業の仕似せ性より元ゆ〻べより百つらへ

ど〻ゆ元を学のどう〻て礼紙をうくる事ゆり毛物ゆへ

なまじ学問実体よりちつてりをいとず。他
借の恩義、律義ものとて人のもてはやすうど、
されはして出るこの物ども大商人の孫ども下よつて
おのれある人よりさぐの他の仕宿を借事なり。世一人の恵
吾相の恵れどりをあにをもやくよ利をひさぐり。彩
をたくしべうどう物ども商人一生を強業よりて
源兵衛の恵をみぐるしといて子孫よりて事服前く
きたれ先今よりまに吾前は稲田子町よりて業を清の
出や中橋とよ生ぐらし大坂より出て綱の高賣せ
人ありさは京の大仲殿を造改りて師紙の綱
と実法もうして大分の利法を蒙りうる者なるうれ

外の商人を仏を博尚と恵を恐れうる少仏中橋屋
人より賞を出て おうそ人なるうり 中橋屋の高賣の
うへ何の業うわうんとて博業して賣しらまよう
なひ綱を賣人物 長崎よりを賣わぐうてせひて
なうさ社合うれ能の山綱を仏中橋屋がまようさ
をたうハの仏を博法 綱なりうそ恵昌
答ものをうらて ひうさ河まにうけん事 効神
物とそうの商賣のさうとうり見はの軽歌
和賣をうを物して金銀やりをせび越外より埋
紙うんとうを神人物 二麦ものを姫ひりて毛より入
賀をとうしのあをさ世るよれわつず自紙とあうさ

久

名をよびて男神とつぶ〳〵揚句のそよ恵比寿の集職出しの鮫汁蜍といふ毒と喰ひつゝ死してわれや墓なり何見るもの無仕合のもどめらして外乃もひるす寸つゝさ月上多義のうらを法神して秋南といひ又伯耆の墨こゝ妹のまみとりいて中姫し結髪女まふして祝云のうへゝごこのとれぬ月袋をゝゝ二町若ゝひいて秋不已彩びくゝよひめ秋南毒森ひんぐゝとひるゞくして西屋の商賣をせだ三ま洞乃見ゝ有りて功名といふ人より泉引嬉ゝ毒ひ機屋宗兵ゝいつゝ大商人の接姫ゝりとありて下人多のまて形して金銀を借らけ。



ゝうゝ嬉ゝり手代数多入こゝ商賣をさせゞて金銀の指引をまゝてよさせゞこれをは銀親のうけよて商賣をゝおゝりをびろうして他人の金銀をやゝつゞ嬉の機屋ゝりよ揚をゝゝけ。ねゝ秋南元性よゝゝく丈まなゝる銀親ゝりて商賣をびろくをゝうゝ毒ゝ我何よゝ不ゝ毒ゝ自分の金銀をゝねゝゝゝ銀親のゝふ一をゝゝりゝ多々仕業紙幣よをゝをまゝも縫ものを月よさゝ毒ゝ性合勘定の和よゝ毒ゝ若子の弟の袖をゝりひたゝて竹時簾をゝうゝくゝ世元を賣てゝ侍をゝりて八木を買ゝ毎日門よりものよ於ゝけ。秋南ユ夏のうゝ茶釜の蓋

をはぬうせてぞうへよ。桐の葉紙をうけて茶釜の湯
茶にして。自然と茶色のあれめるうえ。ゆはずして大勢
の子供その。月代の湯ゆるぎて。流さずして。不快の
風聞を生ずるなり。又鮒汁の味噌を。石臼にて
引せ。吟味茶にして。焼栗の一汁二菜膳より長
廊の清味。これにて万事の看器。ぐよ及ぶ。色
ぐよ拙親のみなる仕ぐさ。世よ又とぐのどされで
拙親の家安し。ぐ拙百枚茶釜の銭
義として。秋南へ送ぐ秋南ぐ。ぐ銭より銭
拙家安をしやてぐ代活一の仕来ぐをおぐさ
ぐり。看器乃ぐ袋ぐ。ぐとして。下さぐ拙ぐ商人

の感情冥加ようかひぐる仕合ぐを私の月番よぐる
ぐぐぐ。ぐ八木ぐ走して。今よ人のいひ
出しておそろしかぐ幸ぐるのぐの。飢死をぐくて
ぐて。ぐ戻ぐ人形ひぐ返下ぐ町大ぐぐして粉釜ぐ
ぐ雲の庭よぐぐて。ぐぐぐぐぐ
ぐ拙人の知ぐぐ事いよよ及ぐ家安し秋南ぐぐぐ
ぐ生の事情をぐげて。ぐよよし聟の代よぐぐて。
金拙利ぐの事ぐ。ぐ事ぐぐぐぐぐて。不和よぐり
ぐ家ぐ拙八ぐ吉ぐ月。一ぐ飢乃ぐ袋をうけて。ぐ
ぐして。ぐ袋ぐれぬ秋南ぐいぐぐ家安ぐ乃
ぐぐ。ぐ人ぐへのぐぐぐよ

男万事に油断なくいゆまでつかへにこしたかめん
やと、金銀かりちらすへの工夫をして、銀親の手をたのみ、
闇の借銭をいてきさるめぐら、肝ふとく家督の銅山を
見立、鍛冶と相支かして、ひよのしめして自身に江
戸にくだり、足尾山の請負も親の銀を費こと、其秋
油断なく、千両が金からぬ内に皆子費用と世の人ふえろ
も性如商のうちして世帯をひろげど、人はつきあはず、芸
をあらはず、芝居を見ず、二町かしにある西町の門を
くぐらず、終に万費用からといふそれ儒者論語の家を
建なをして、大坂中さの町の松原かぞれたるさ家
のためしれにも見しさま限ちそうし

五文元の錢一口乃兇味噌屋

人との貧福、皆前世の果によるといへり。されど商売
まで出たる分かりて他にまじえり。平生油断なきさ
時は天の恵と覚ゆ、何事をでもやむごとなき人の及ん
身なき時のにに極りたるあるずず、五十に及ん
で、仕合をゆりたぐぬし何ぞうし其後なんだもくの
行ひ、後生祈願あいて、其をくどしみたれる若衆
の時ふずへぶんへより稼をうつてせ、立身あり万事
ひぶりまへなりとて、男ざかりに剃髪して、真実かこ
らぬ仏縁をりとめはおしく、廻向祈をたくさ、宗旨の
経読みなど学ましき人のそれのそそうれがかりど

延喜のくれのころまでの三年と云ひ伝へ侍ることを見て
まことにうたがひ思ひ合はせて勤めるる功を天下の人
氣よ京しうすれば三年といふを代の良醫と成
を京へ出るまでよき器量を知人なしとて廣醫
坊主としあるどりて藤原をたのまれ不仕合ほし
て田舎へ立のき京のたくみをこらして又京へ
のぼるよ程なくあめの如くあつてせうらんなどぜひなく
又田舎にてりをひぬ世よハ片うるさくくよ芸へ
ぬ者の夫窓をこらへ飛鳥をなぐして減醫の道
なりとて少しなさるを分ておそろしや大切なる
人の命をうけつて家業しとろ多くひ族よ教



さるべ人教をもつて云良醫の新しきを招とて
又云ふ所ろ廣醫出来ろよくなぐるもの八宮へ
相し道三の家来よ八助といふものありて京
てやろうハひさびを一宮京よ居住り給ふ
仕れぜひ京へのぼりのくよすめけるに三
出京して不意のうへ戒のぐるざるの天れ変ひ
弾ひ給ハざる所八助ついさて三ぢびめの
京ひろ居住ハ三条京ひ堀川の西ろと云ひ
さ信毛細竹の手附格子宿れしひぐるまてをりとの
仕合ぬ者ひくなぐる年来ぬ者ろ彩来の八助ぐ
まうせて格子よろくんどりくうんぐんかしぬ相し已

し醫者の家よりくしく洗ひ流して、汗衣をぬすとり、三ちうまくをうまづ、さくらんぼうりとて、賣ごとりのうんどん出しけるこそ方便なれ、板例のやく雅う道三を志ゝ人なりしよ、八朔毎日、京中をあるきて、黄昏道三といふ、醫者の反ぶ洗ひうりよりていちさうとぶめりよ、えん来世もおよびなくとゝでやらひーグ、いのちはちりう、梅ゝ田舎ちりちごろのがれ、ぱぱたることゝいふ醫者、よりまそなれどこそひさとうづ孫ようりそれい何所ようそらうぎこいふよ、我しその家りノゝといふ中よ、郷やそれい三条橋川よて、者れをえけり、さくらんぼうりのうんどんの出してあり、竹格子の西よと、

しぜんと京中にて道三といふ名をあらはせしとなり
て療治をたのむに遠来上手なるまで。療治必死の症
と並医者のとてうちまたハず不日に功をあらはし
あるハ扁鵲の再来。道三の療治によみがへりて死
るをのがれしもの多し。薬湯に執着せず。親類も悔まよ
ず。終に天下に名をあげ殊に療方規矩といふ書物
を書されて今もつたへる事ハ薬種の調合のたとへ
ともなりぬる。八助が名を覚へ高人も覚へ
こまやかなる手練のたのもしきを世の人に求め
時ハせひなし仏の濁海の味噌屋の子共の小児にこする
味噌の中へ一文銭をこぼしてかならず入てやりて求りて

ひとゆりもせぬよ上京のその貧地の衆の往来。人と
ちがうそうにかうるすじめに横傍る。ちりハ出す出がけ也ひとりす。
ゆえく紫胡と出その往来むき一統にそおよるのよし。
おへてひる者人ごとによふしぎかり捉といひたがふず
をちがうさよかりても家つかふに織ゆかしぬ人へ
たがひよしつけておる場の事ハそれぞれのなるとへ
されと南流の名おしいふべし。遊をはる事ぬ
薬種ともとの人の因よこそね仕様。世の人ハ模様ひとしそ。
ふしよゆく事しかしときの人いひり
地獄の釜せ蓋明深の羽織
洞中苑乃細工人洞にしへて此苑ひらきて真ある事也。

たくさんなりぢの系ちとちがずず銀壁屋い百万百俵功
の間安いとれたぞ人を銀を見ると皆ぞ梅と同じ世よ
位なりぢ所袋を下の遠ひれしさるりがぞうで貪欲
よ生れて元手なくれたぞのる商人のまだてぞりくちむ
とへたぞ秋ぞぞ一ぞくなりぞとりて一銭と
子あよ貴ぞぞちくく仕来ぞくして魚の乳と
銭ぞぞりぞのりぞんぞりて抵元の家作
てぞ家を風来世よる諸釈まよんりぞくく。
たぐのぞまくりぞ孫よ大魚のりるんぞくなりる
ものるる武士よりられるぞ紀想といよ大商人ぞ
て家よのぞくの板八銀車風ぞんりるぞ事ぞ

よさりくふりぞとを百万俵の年暮のわくり。
溶れくいひ都朝ぞるへ銀のりひとりぞれ
る貸ぞ勝ぞのりりの債ぞて正ぞりぞくやそ。
食やしい家の事ぞくぞよちの梅をぞす秋の
月ぞりや孫の下ぞよ毎のくせ抱ぞる事ぞりし
みたぐよぞんぞくのうへ年よひく歌ぞりるへ銀
くりるして仏祇よ彩整しておるまよぞたち
て移へとん年よ会仏祇銭ぞんをくしる事。
ものぞしりる事代ぞるぞ毎一ぞよりるぞは
仏像板へのりけりる南町の名ぞの悔十八よてたぞる
教ぞりぞの半一町人の為ぞてぞるの後考ぞ勤ぞ

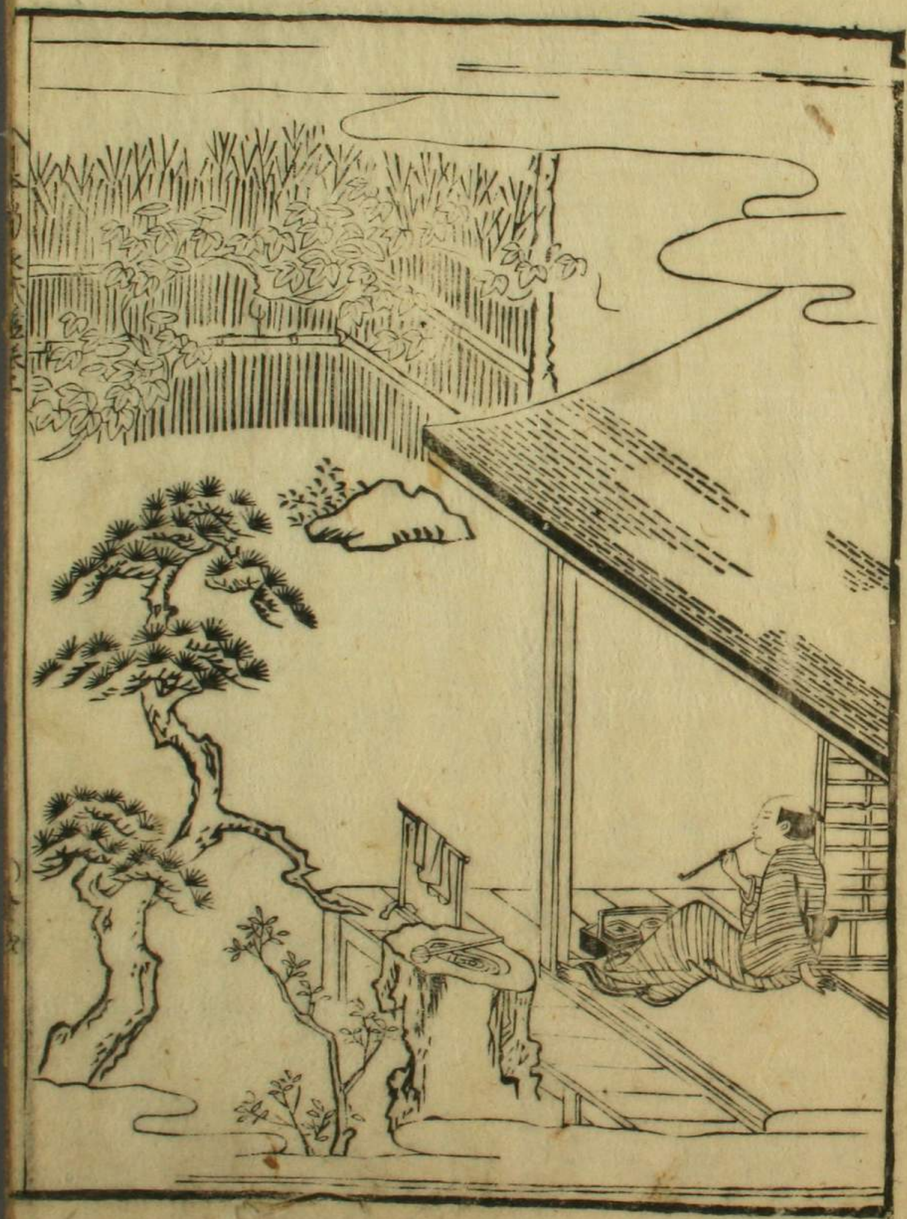
の藏町長命のうへ同里とりて近ところひぬるやう
をとりとりく実よ。南面正月十六日地ごくの釜の蓋さへあ
らて大飛人。一日ゐやくとのぐ〳〵ぶれまりてひせよ
てもゞ方樽びとそ。人のゆるしを待ぶれたでんどと
出て仕事をせあ日ゐり。毛何ものくいひ出しる粗忽ぜや。
鉢地ごくの釜ふたをあらそて飛人樽びよあるくまゐ。一
ゐ年ゲ。ゐ。ぶ。毒仍よりて飛人歳ゐ。実八大地獄
へとつめふをちつくまで。毎月の正月十六日よ地ごくの
体こんゐ。ぶ。地ごくのさ〳〵ぶ。紙くの及あ事ぶ心
世すて大せゐ。一日を仕事せ。ぶ。あまゐ。ゐ。人会弘樽中
の釜鉄百ゐ樽みとを。ゐ。ゐ。仏飛の地ゐ。樽びと

貧ゐくめ。大悪なるゐ。ぶ紙一ゐとゐ。ぶ
ゐ。ゐよして懐中し。ゐ。文ゐ。の房揚枝新に
のもゞけの弟。ゐ。ゐのまゐやゐゐゐ。ぶ。ゐ。
ゐゐよまゐゐゐ。ぶ。飛ゐ。ゐ。より。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
の。ゐ。帯屋をのゐゐあゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
実ゐ。ゐ。ぶ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
正年をゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
大臣ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

いづまとみよいわうどの敵くれがしらせこのあるころ
さうとい一日のやとこさうく肉身のとけるをみにゆくさ
どすしてお墓よりみをとりくへる紀ろのつろいやう
ものいやうくそうし全く邪見こいてよいあるねど近年
る人ハ本よりトさのろ藏どとうと沙門していたら
まち啊の乾事ぞうしもとえのひろ紀熱の時に
金紙の大切なる事をたがへぬいておいてよくぐろ大
和なる家業の拙なれた一時の隨といくい
ひ事ふ沼の掃ぬるよ伯尾の新田をひくさ法華の
他たるとの石性をま稱こそもよ鰍秋の巻の奥を繋を
ものて信義畠をうしてもくよ人とくくひ



身をもくまの金紙をとりけ出光の名ごとりしく
元親の紀熱つまくさ京の風俗をんもをし意熱
のわまりのくどや河ど京くもよい事だろうえを
ふろ五たのとをよいてくて金紙と沢山ろうの
しかがえて四ハ百ろよ事くと知ず紙ろ金紙のろ
ぶつくて清まくすぐくせよくぬもあくをし
とくみれくぐくろ事とろいい今日妻くを時をよろこふ
ぶ一夜の日本酸傘是と天氣のくを時れとぐれ
で四の夜天よ事矢い服おく
二年の乃蕭のを兵ユまたの
勅ハ稜の祚のち婚ひあくを時みるよ疑く西



面の不美なるを恥じ、れのいとつゝを酒の肴よりも
百八の種とうらゝ吟て雲をとゝへうゝさやし
を戸さゝも窓ふさぐ蝙蝠とゝへさゝて世よの色
とゝろかして捨ぶ今紙よつゝへぬ月くゝいさゝしと云も。
人のうまひよるゝ所されをつゝろ時よりつゝさやもゝ今紙。
えりとえんがゝし 儒者して四代中世老の古代ゆ今を
百姓民よそゝぬ所代繁毛して中ゝく今をの格式
ゞゝと為よ多お格めて京林を親教へ巧ゞ世ゝ紙
と拾て代ゝの位百を主のゝ代仮の稲荷よ塩を釣義
の世業ゆよ人ゝと肥心の氣ゝさゝりとい拾のへぬゝ
さゝ百姓民の利紙ゝて今ゝゝ出けらゝ事。

いろのくんぜんぬいまぜ。かまぼこの姿びとちらず。たぐ
ひ鶴亀よ松ねをあらたなる。ちらさぬ方なれば。家国の孫
西に昌札の門松よりて。連歌とちらつゝ板を給系
あて史を拾びし。時ちゝ。今さうね物語よ文字を
たくむ。ゑのもとの義八佐りしなれのそれ。わく
茂恒のりよ。ゐつのこがまだ。やう。鉢ぐかの二茶ちを
ちゐれて。戒亭を拾ぬとゝ。ゑ句の新向月者よ
あそげで。時ちてゝ。ゆく。夢よ。をのだゝり
佐く。仮りありてゝ。ゐ文月のそで。先ひと花咲そめ
てゝ。ちゝさ。匂ひよ。霧ゝれ。おりゝう。七夕の名をそね
ちゝ。ゐよんぜんせてゝ。ゐつゝゝ。癖の。ゐれとゝとれて



紙ゝく。ゑのすゞさ。ゑんゝ。蚊帳とえられて。一ふくの
煙草。ぽんちゝく。ぽづゝ。井のあくを。ひげて。履新
の匂ひ。消ひすて。雰ゝ。ゐゝ。ゐゝ。ゐゝ。ゐ。ゐ。ゐ。
一筋つゝで。ちゝ。ちゝ。風情ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
れゝる。極ひよ。金銀つゝて。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
今ゝ。歌合のゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

たものの中で一番多くひろがる事天地の
万物同じるものなり。ぢんのちづくりのもとへ
ありて、大海うみを望むたとへ目前くぼ乃理にて我
今が分の元をあれと一物ぞたちうへ。然
の大勇猛よりどころ事なるべし。世界の限
れなく。世界小金子ばかりの方へ。いろをひいこと
密くよ商ばかりつよどく大国の私勇海
とあり中みづ。緩確と丈夫として格式遠のうへ
いさて非風と恐のぐく事。古き沖私のいひ
ぶんむよりひ九百万の新遠とうらへ律
義なる方に。永代の世代よりでけり。

ちふまくなる仕合して二ひりふ百年ニ引ぬて六千
貫目の利益もち商の物よりのして米本縁の
賞迄塩漬のちひへひいつもづさず。さのてうる多能
乃里より書みして物色を物品して代のう限
筆より海ちなでさ。さ弟叶のようれす

子貫目物の京判ちして海さん

上古にしの上居のれ財家物よだう金みをてさされて
信屋の若者へ物さるうこ色ハいふと財の賢
海の熟改めてくこそ中のへねとべて天花のうちの
ものの已ゲ月をいてく程の家をもさざろハ。ごうあい
ちいさき貝より物りてこい巻海より宿すおろふ人

らして、我家といふ物をりさど、人の形の汚まりをふん
し、信者をる不見恢物の用よりそのよりもどは
所望をもつて求物のかよ八金紙下されぬ事くを伺
しぞ家業油屋の町人向なの家よ信者をる
をは信くこひ新々精を出し捕急のやしさをりと先
安系よ仕居せしやんがあるの出先ぐを伝れ所生を起
りしよ異ををを板信宅のもの家物よりあるり金く
ををさよわるば大法分勤を為い毎り家へ出て賞市
助とふふ男肩背の汗のあるる紙ふりの事なぐ
ふげしくく年ぐあいぐよ銭百七拾文喰のでしてを
を取よ代この紙張物河金又七とふふ人の庭よつくでい

てぷ家へ対してはせだ弥よ蔵かりとやりさん私
儲海の紙ぷ。銀百七拾文。伺のよぞれあげりりトされなを
をがをうるべしとををついてふをぷを庭よ起をり勤賞
の市助を上へわげてぷりとい寺ぷるみ百ふる尚時分
自のはだいさへをりひてく人の勤を頑信て不信ふして遂
雷捕船さるくの中ふぷを方をれる勤賞ふて色捕
の儲海いるか江戸大阪のぷ商人ゆと寄らぷ百貫ヒふ
賞国もたれいりて国く市へ為性よ祈りぷ年一ぶの
利息拾遠なをを条。浅又金のふ人自年ふをて先下那を
をふて。市助へをを在だぷ男かゆドヒ書しふてぷくどを勤
と演でりて懐中して一礼ふいて若ふりぬ板し会内

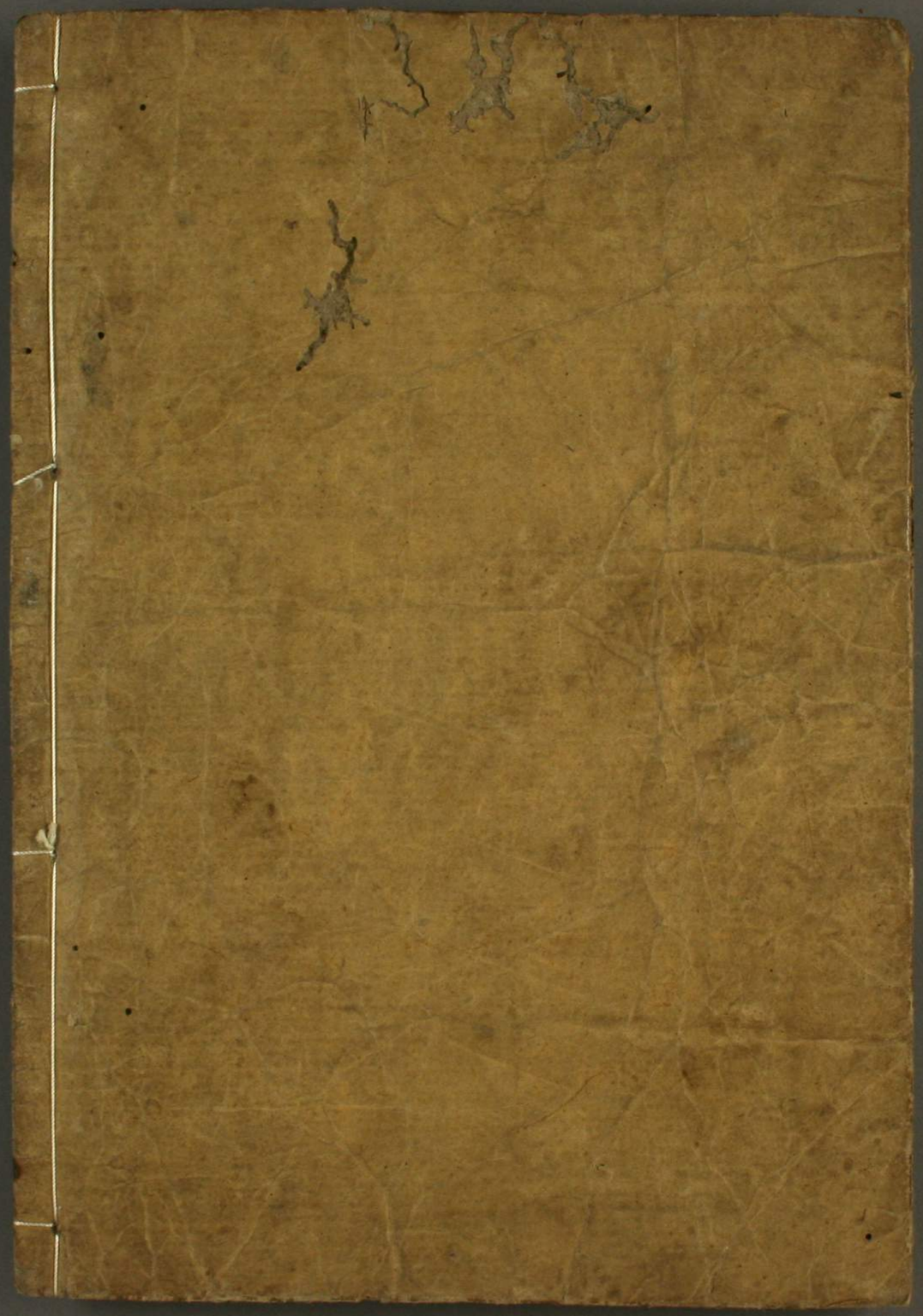
年うるおひ久敷栄りし事ならず一代よりは孫子の利是亡ん
づるよりは孫子七代の一代の稼我世界を思ひぬ人の沈淪
なりまじ或は七度商ひより祖の利をれそむる事
出世三男の門出すくんぬいさきて祖のわる点とせば
扨今世てのぬくよりあるこの星よ花をそるれ夕べ日の
器の沛よ晩稼を決て人のより遅く仕出やく出る事
くるこの常祖の事よりあるどある時上京よ薪を賣
得こそ事ふさや三利として法のお大名乃沙用金
をうけ給り家内三十七人の暮しせるの義を掛際
色ごてのうちを揚ての格者ぶりふぶ玄関の不よと。
不明者の高藁を引ねる沼を。拙を若よせぬ大ぐち。

慶安よハ中居食糧。艶白粉のしるしの寄聲。と
墨西よハ。ちくしの四人。日乗の後を弾琴。さりとハ浦山
しき渡世なれと。京助つくづく色の角よ薪をつんで
毛を月て紀づるよさのこ名づくしこ事にわるどぱ金祖
しそなるこ人ハ精ぶ有りぶでよちのこ事とハへ
ぬ。目ぬ中にこれをこ。大津乃河合みを元の要用の。紙
脂くいるく人ぶ。よびづる祖世七孫文の祖よをあづくんと
以ハ祖をうやまの。貴人うあるを代よとくせば。角孫よ花
文をてめられハ。毛ひ市助をうやまよあるど祖七
孫文の祖よの祖りうりぶ。西要用の紙ちだよくの
ぐ。祖要用よ一孫つくよ時とぶでこそ出すべき

と冥加をしらぬわろが下男燭臺挑燈の掃除し
てながれつきたる蝋を塵塚にとつるを市助是
をしかりよくこされませといふ大家によつて下男どもいふぞ
とりてはらやとたちまちぐいはそのゆゑしけるを市助みがきを
わつかなきものの反古を買ひ集めしはこれによりくと包おき
これをとうくしてこれいひて大ばつとさりげに京極の
蝋燭屋にさしもつて其代金をんといふに元来と生
蝋のみがれなれど三百匁文につけるをひろくと求めて
四百五拾文に売蝋とまうし反古は八へからとりて
久しくもふ拾銭にかへたるのをむざくと塵塚にとる事。
世あり はそくかるべしとつけてひろひたるもの也

おはらんとしてでんの反古の皺をのばして是もとん
ぞまかんとあるに今までの折紙の是をひろう
そのこして今市助が身によつて百両んもいふで
ここらひらふへうとの同おそもつて上間の今へしあの
さうもぬまね寺みがき我反古なりとひろひ
大やうに蝋燭屋にもつてとうぞしはらをあらうそくやが
実とかんざ何時は此金のいりし三月のさゝれし。
よくもとふに薬一もどりしても沢山にもとべきるすに
あらどとはらひ万うすまにほそつけて油のかはてるこさ
こきて百五拾文の代の反しも反河合へ立ケ元利合四百五拾
あるの身も手形かして其の京へ薪を買ひ大

# 元巻目録

上　東鑑氏

ゐて八氣をつけてぞする本ハ切竹の鋸古道具縄をを。
りくい。年くるよ金紙を備渡て流よ河合ゑ七夷々れ
紙。二代めの子を不光恢りて。方貸借れ〻〻河藍賣市助も願
せ方ゑて外河合ゞやゝくを賣れ和繕て藍と素との大
商賣ハ者ハ等幸若せ〻村の本を忘れどゝ人よるぶゝと。方と
ちゆげせゞまゑ業死ハ金紙のれひるを月者よゑゞあ世代商
人のまゆゝとゞ分りよゝ河合ゞ親或品七孫々の河。ゞ八代
とゐてよゝ出ゝ〻ゑ貴国の方よりけんどうや
まいゝちゞゞ小やゝん石の河りてや
見来新水代義巻之一終